

愚劣な贗造語「メセン、アタリメ」

中尾哲也

「こぼは世のうつろいともにかわるという。」

こぼは、世の合意のうえに成り立つものだから、ゆるやかな変化はゆるむを得ないが、あやしい造語や無謀な変更は、常に警戒し、抑えなければならぬ。

こぼのいたずらな姿態を、為す術なく眺めるばかりか、矜持を捨てて訳知り顔のオトナの仮面を被り、老熟を気取った理屈をつぶやいていると、その民族は顔魔への坂をころけ落ちるおそれがある。

「こぼの乱れは人心荒廃の基」と言い切っても、杞のくひとの憂い——とはならないだろう。

当然のことながら、ひとはこぼで考える。こぼがなければ考えることができない。こぼがなければ、ひとはひとたり得ない。それぞれの「母語」の、より正確なことで考えなければならぬ。

わかりきったことを今更のようにこぼしく言いたるな、との声が、そこそこから聞こえてきそうだが、かりそめにも、こぼはにかかわって、なにこぼかを成そうと

いうほどの志ある者は、こぼをあなどらず、もてあそばす、こぼはと真摯に向き合わなければならない。

テレビの長時間番組で、あるジャーナリストが、つぎのように言うのを聞いた。

「忌憚なく、ケンケンガクガクの討論を……」

諧謔や反語とは思えなかった。訂正の告知もなかった。「ケンケンガクガク」は、喧嘩騒動と喧嘩騒動の語呂の類似に惑わされて、いつの頃から何者がが無足見に拵えたのだろう。救いがたい軽率妄動と言わざるをえない。

おかたの辞書が、これを「混交語・混淆語」としているが「捏造語・贗造語」がふさわしい。くだんのジャーナリスト氏の深意をくぐると、譯譯は「混交」となるのが本道だが、強引に「喧と譌」をつないで、何冊かの辞書で調べてみたところ、そこで得たのは、いずれもジャーナリスト氏の意向に背くものでしかなかった。

ところが「辞書に載っていれば、一応、正当」といえるところがある。水と油を混ぜようとするかのような

捏造四熟語を、辞書に載っているから正しいなどと言すれば、粗忽の誹り、嘲りを受けることになりかねない。認識の誤謬や記憶の齟齬は論外だが、喧と譌の混乱でも明らかなように、成句や熟語などの濫用はさけるべきだ。

殊に、古い時代の情調を手軽に得ようとしての、慣用・常套の語や句の不用意な使用は好ましくない。

布や紙が変質し手垢や皮脂で汚れて風台が損なわれるように、植物が萎れ、奪れて、みすばらしくなるのにも似て、せつかくの表現から佳きおもむきを消し去り、凡庸・卑俗におとしめるおそれがある。

「限られた時と所、特異な人事風物を、それらしく描くのに最も適なことばである」として、自我と自尊の膨張を、控え目をよそおってかかげながら、上記の語、句、成句や地口、熟語訓のたぐいを、充分な咀嚼・吸収を怠ったまま、木に竹を接ぐように使っていると、隠したもりのかたよった執着は、かならず見透かされる。

こうした漢字・漢語の晦渋に業を煮やして、

「字の数が多い。複雑で深甚にすぎ。児童生徒の健全な知育の妨けになりかねない。遠い昔にアノ国から押し寄せてきたという、そもそもそれが不快だ。アノ国からやつてきた厄介な代物は、思い切って捨ててしまいたい」

とまで極言してみても、すべての人事・情動・風物・思想を、とどこおりなく表現できる固有の文字が、わが国に

はなかった。上古よりもさらに以前からの具体的な記述その他の、固有の文字の存在を抵抗なく納得できる遺物は、現存しない。

われわれの祖先は「漢字は、むずかしいからイヤだ」とは言わずに、他民族への強い浸蝕性という蠱惑的傾向を秘め備えた漢字を、訓読、カナかな文字への転用、おくり仮名、漢音、呉音、唐（宋・元・明・清）音の併用などの手段を駆使して懐柔し、独自の味わいを作り、蓄え伝え残してくれた。それを受け継いだわれわれの本質は、容易に変えられるものではない。すべての漢字を根こそぎ捨てて、漢字を介して認識した全事象を洗い流してしまえば、はたしてなにをどこまで表現できるか。漢字を完全に捨て去れば、たちまち機能不全に陥らざるを得ない表現手段の内実を熟知してなお、

「大和民族だから、日本人だから、アノ国からやつてきた文字なんて、イヤだよ」

と言ういとまがあるだろうか。われわれの遺伝子から、この渡来の、象形、表意、表音文字の全情報完璧に消去するのは不可能であると断定するほかない。好悪いずれにせよ、祖先の優れた資性が巧みに作りかえて伝え残してくれた、現存することばを慎重に守り続けなければならない。

次のように、強く言い張るひとがいる。

「むずかしい漢字漢語を多用するのは野暮の俗張。深くハイツテ浅ク出ル」と言うのではないか。だれにでもなめらかに読める仮名の多用が望ましい。漢字漢語の賑々しい狂生志向は、かえって軽薄に見える」

この主張が唯一無二の正論であると、断固として言いきれなう。複雑で微妙な「難題」を、冗漫を避けて仔細に的確に表現するには、それに適うほどの漢字漢語の使用が必須であり、それに適う多少の屈折と晦渋はやむを得ないのではないか。漢字漢語の少ないかなかな多用の平易な文字遣いを貫徹さえすれば、なにもものをも適切に明快に表し得るという主張は、それが強ければ強いほど、逆に、複雑な媚態があらわに見えてくる。内容の硬軟、純度、傾向などを無視して、なにもに媚びてか、安易でかるやかな表現にのみ固執し、ひたすらに晦渋を脱つたかたくなな平易偏重は、着物のまえを隠け、ゆるんだ帯をひきずって歩くのに似て、締まりなく、見苦しい。

極端に過ぎるかもしれないが、次の例文を見ていただきたい。

(1) ヒンタイからの、セイメイイジにヒッスのソウキチキシュツ、さらにイショクという、コウイそのものは、シゼンのセツリにアガラクアラツなものである。アキイのウムにかかわりなく、ジドウテキにタニンのトシシをマツことになる。モジのイにスンブンタガわぬ

「ムザン」のショギョウである。

(2) 顔見体からの、生命維持に必須の臓器剥出、さらに移植という、行為そのものは、自然の摂理に抗し悪辣なものである。悪意の有無にかかわりなく自動的に他人の頓死を待つことになる。文字の意に寸分違わぬ「無慥」の所業である。

(2)の漢字を見ず(1)のかなだけで、おおその意味がわかるのはなぜか。

(2)のほうが格段に読みやすく、理解しやすいのはなぜか。思想信条の偏りや敵意の籠もった片意地の意匠を捨てて、それぞれに冷静に考えたい。仮名で書いてもボンスで書いても、国語をフランス語に倣えなくても、ことばの形も意味も、わが国固有の「音」を漢字に置き換えながら蓄積したものがほとんど、という事実は、どうしようもない。

遠い祖先の独創かと思われる、いかにも好ましいオノマトベ……擬音、擬態、擬声、擬態の語と、その周辺のことばらしいものを駆使しても、表し得るのは、ごく僅かではない。それほかに、われわれは漢字とともに生きている。

それぞれの業界での承認のはずの造語、たとえば遊興・歓楽・歌舞・音曲・演説・演劇・映像・音響・犯罪とその組織・医学・医療・遊戯・競争・警察……などに携わる人達の隠語めいたものを、あまねく世の合意のうえに成り

立つことばであるかのように、当該業界この面のかかわりがあるがなからうが、ためらうことなく使つてのをしはし目にし耳にする。なかには、言い得て妙と、うなすける造語もあるにはあるが、ことばを使つて、なにごかを成そう、というほどの志ある者が、本来のあるべきうたをないがしろにした、ことばの贗物を、それがなにものかを確かめもせずに使つては、なにごかと言いたい。

その一例として「目線」がある。目と線でモクセンでもメスジでもない「濁稱説」には、思いが萎える。視野を視線があるから「目線」もあるということなら、視野があるから「目野」もあるということになる。その説みは「メヤ・メノ・モクヤ・モクノ」の、いずれなのか。

視線があるから「目線」もあるということなら、視野があるから「目野」もあるということになる。その説みは「メヤ・メノ・モクヤ・モクノ」の、いずれなのか。

名詞「目」の「目」横目。伏し目。流し目。「目交せ」「目離し」などのかたちは、対象と意向を特定しない目そのものの姿と動きたから、ことばの成り立ちを素直に冷静に考えれば、瞬時といえども「対象の線」を介して目となるものかを繋ぐ、いわゆる「目線」は「絶対」にあり得ないことが、自明の理として即座に理解できる。

事実とはいじめるしく食い違つていて、間違っている「目線」の使用は、形勢という文字の意のままの欺瞞であると断じたい。

対象を特定した「視線」という意向をともしう行為があ

つて、初めて、目と対象を繋ぐ、さまざまの意趣を帯びた「視線」という「仮裂の線」が、抵抗なく納得できる。また、目の輝きや目つきの奥にある情動も、目や視線の周辺に配置することばの工夫で、広範囲に、深く表すことができる。

「目線」の、相手を選ばない濫用は、ことばについて正確に学ぼうとする者の「誤解」を、冷ややかに笑つて全否定するのと同じく、欺瞞行為であり、押しつけがましい欧米系外来語やふきけた和製擬似欧米語などの多用と同列の愚かしさである。さらに言えば、内視の極めて乏しい自家撞着かもしれない。

「目線」は、利便性優先の当該業界内の遣り取りに限ることを強く願う。

日常のなにげない会話を、いちいち言挙げしようというのではない。

公共の電波や紙誌の、報道論説など、対象を特定しない伝達では、双方方向通信が容易なデジタル機器を備えていても、受ける側「視聴者・読者」からの異論などの、具体的な反応は、さり気なく、遮断あるいは無視せざるを得ないのが実情だろう。

それはやむをえないが、そういう「高いところからの物言い」では、なんらかの責任をともしう正確な「伝達」

が求められてしかるべきだと考える。

「高いところからの物言い」というところで、さらさらした不快なモノ、が記憶のなかでうごめいた。

少し脇道へそれるが、そのモノとは、ほぼ四半世紀以前から時折見聞きする、新奇を装い異形を街つて、この国の事象人事を踏み荒らす作物のことである。真の新鮮味は毛筋はとも見えず、断じてあれとしか言いたくない、珍種変種の横行は、個別の呼び名をあげるまでもなく、わかるひとはわかるだろう。出版不況、特に文芸図書販売の低迷を憂えながら、本質を見誤り、我が首を絞める愚にも気づかず、量販営利最優先の軽はずみな話題づくりに汲々としてゐるのは、哀れを超えて滑稽でさえある。擬似冷血で変化が異類まがいのもろもろを陳列しているのは、驚きあきればかりだ。サル目(霊長類)ヒト科「人」として生涯を全うしたい日本人には、認知しようのないコケオドシとは思えない。あれは若気の至りと笑って見捨てたい。しかし意味不明の罵詈雑言には、ほんものの「ひと」の思いを腐らせる毒がある。あれらが世のありようなのか、あれを世のまことのこころと思えるのか。

条理が不条理かの段ではない。

五十年前の、

「ムルソーは不条理か」

したものだという。

いつの頃か、それに語呂を合わせた駄洒落が流布した。

「ガシヤカングキアメラレ」

おどろく当時も軽薄な思いつき以上のものではなかったと思われる。今となつては、おもしろくもおかしくないどころか、ばかばかしく、腹立たしい。

ところが、最近、次のような文章を目にした。

「感謝感激が、雨敵のように」

もとの語句と駄洒落との語呂の類似はともかくとして、これを口合、地口、秀句、などと称するには、駄洒落そのものの意味の歪みが酷すぎる。好ましいあじわいの諧謔は皆無だ。感謝感激という情動がいかに激しいものであつても、本来は溫和で嬉しいはずのこころのありようを、冷たくて硬いアラレに擬するのは、感覚や性向の捻れ、あるいは歪みであると断じた。

冒頭の「諷刺は僞僞」つながるのが……で、思ひ出したことだが、昨今、気になることが「矢弾となつて」この身に襲いかかる。

公共の電波の報道や紙誌の論説、その他でも、次のように話し、かつ書いている。

「伝統の優れた技芸を後世へツナゲルには……」
察するに、この「ツナゲル」は「つなぐ」であつて「つ

の、僞僞諷刺の論争を思い起こした。

ムルソーの、色も匂いも失せているのかと思わせる身も裸むぼごとおそろしい鮮烈な純一無雜が、今はただ懐かしく慕わくさへある。虚飾と偽善を生きる糧として恥じない(似非良識の社会人)を苛立たせ怯えさせる、ムルソーの澄明に對して、あれらは狡猾な欺瞞であつて、あれとこれとは相容れず、比較すらも不可能だろう。

ときには取り澄ましたり、ひるがえつて故意に奇態を演じたりする汚れた顔が、被つたばらの隙間で見え隠れする。手垢や皮脂で汚れた舌はで覆われた凡庸で狡猾なおのれ本性に気付かず、ぼろのにおいの沁みこんだ短小の才気や蘊蓄をけちらすのは、まさに醜い。そんなものを身に纏つて、なにに化したいのか。

当地の俚諺に、

「自慢の糞は犬も食わぬ」

というのがある。

虚飾の「意匠」とは無縁の、見え透いたばかりの、いや微りのないモノを作ること、純情が肝要だ。思いつきや嫌味な飾りのうぬぼれを麗々しくならべたてても、自他ともに恥じるところのない結末は、のぞむべくもない。

講釈師か娘義太夫かが、乱狩、説書、説書、と熱演した時代があつた。矢弾が激しく飛び交う古戦場の様子を描くこと

な、ことができる、ではないらしい。この稿では「ツナゲル」とづなぐの文法・用法の原生樹林へは踏み込まず、歪い大樹海を横目に見ながら、あえて、こゝを単純化する。なぜなら、目を凝らし耳をそばでと、標準語・共通語として罷り通つている(らしい)江戸弁? 東京弁? のなかで、つなぐは片隅に追いやられ、つなぐが濫用されているとの印象が強い。それと同様の疑いへ、思いを集めたいからである。

親切なツナゲル君に、次のように問いかける。

「この針金と紙紐、つなげますか」

「よかつた、僕がツナゲておきますよ」

ツナゲル君は針金と紙紐をつなげてしまふのだうか。

つないでほしくなかつた。つなぐことができたか、つなぐことができないかを、つまり、つなげるか、つなげないかを、問ひかけたのだ。

へおてて つなげて のみちを ゆけば……
これもまた一興、ということか。

背に「おづ」という。プは負を勝負のプと読んだのか。あるいは幼児語のオンパからの転訛か。お、う、という滑らかな音の中に、濁つたプが、なぜはいり込まねばならぬのか。日本列島本州北東部のある地方では、背に負うを「ぶ」一音で表すと聞いた。それはそれで結構だが、標準

語・共通語を標榜しながらの、おづうの場合、フなどという「雑音」は深く捨ててほしい。背に負う・背に負って、で事足りる。

戸惑いや苛立ちを感じる異形のことは、列挙するだけで疲れて果てるほどに、紙誌や電波のなかにはびこっている。現今のワカモノコトバなるものは、ここであらう「怪しいことば」とは類を異にする、ことば以前の忌まわしいオトにすぎない。

鬚を、鬚をアたる、アタリめ、アタリ鉢。

剃るが、剃るに転訛する。異体についての、内観も検証もないままに「あることか」「スる」を忌避するあまりに、忌諱と称して、鬚をアタリめ、髭鉢をアタリ鉢と言いかえることは、児童にも劣る愚行であり、あまねく世の合意を軽視する独善の傲りであると言わざるを得ない。そこにはなんの味いもなく、名状しがたい脱力感だけがある。この不快は、氣候風土、口蓋と舌の形状によるサ行の発音変異、語音の高低、強弱、抑揚、下降調、上昇調を含む地方こととの差異（方言）などを云々するくらいで解消できることではない。

子どもでも十一、二歳ともなれば気付くはずの、ぶざまな異体を、強く疑い、そして執拗に言い立てる率直なおと

く、裂け、裂こう、で、いすこのいずれが不都合なのか。

多用される【終助詞】の……ナア。

明確な意志表示に伴う責任の負荷をおそれて、それから逃れるために、ことを曖昧にしようという甘えか、それとも生来の優柔不断か。いずれにせよ、ひよわな責任を露呈しているのしか思えない。

さらに、アル意味、結わく、不要な主語の濫用、謙讓語・尊敬語・丁寧語、美化語の雑駁……など、際限がない。

スゴイ、スゴク、というのをよく見聞きする。俗語の掛け声ながら、頻繁に使われている。非常に、格別の、大変な、並々でないなどの意で、千年の昔から使われていることだから、誤用ではないにしても、思いつきがわりかと思ふほどに多用されると、ほかになにかことばはないのかと言いたくなる。ひとつのことばへの依存が過剰になると、左脳前方にある、人類固有の「文法中枢」と呼ばれている部分が、怠けて、働きが鈍くなるのは必至と考える。すると、言葉の貧しさがあらわになるので、対話の妙味がいちじるしく損なわれるのも必至ということになる。

草木もねむる丑三三刻、どこで打つのか遠寺の鐘が、
「陰に籠もって物凄く」のあたりに、
「身の毛も立つ」ほどの真意と深意を求めたい。

なが、長い歲月のうちに、ひとりもいなかったとは思いたくない。

古来、当地にも、啞然となるような、漢字や数字の読み間違いや思わず仰け反ってしまうほどの奇態な造語などが、数多くある。しかし幼児以外のほとんどの者は、その異体に気付いて、マチガイはあくまでも間違いとして、素直に自然に修正している。気楽な談笑の場や日常のなにげない遣り取りのなかでも、怪しいことばを見聞きすることは極めて少ない。

破く、破ける。

辞書には、

「アブクは「破る」と「裂く」との混成語。破り裂く、やぶる」とある。

それに従えば、「木の股を裂く」と「木の股を破く」さらに「木の股を破り裂く」の、どれもみな、あまねく世の合意によってなりたつ同義語、ということになる。

はたしてでたかどうか。

戸惑いと不安に耐え、思いを鎮めて、平静を保ちながら辞書の字面を眺める。いかによつて考えてもこの混成語とやらには、必然、利便、雅趣は皆無だ。破る、裂く、が破り裂く、に、さらに、破く、破ける、に、なぜ化けるのか。破られ、破り、破る、破れ、破ろう、裂かれ、裂き、裂

ことばは、世の合意のうに成り立つものだから、それが全くの間違いでなければ、たいがいの「スゴイ・スゴク」に耐える覚悟はできている。凄い画家、物凄く濁流、物凄いい形相、凄打者、凄く冷たい、凄く速い、凄腕、などは、抵抗なく、あるいは抵抗少なく聞きとれるのだが、

「スゴク柔らか。スゴク優しい。スゴク滑らか」

などに出会った、つい溜息をついてしまふ。針の小を棒の太に、とまでは言わないが、なにを思い量つてか、社交辞令の一端のつもりか、なにもかもを一律に、やや大仰にあくまでも公平に、強調しておうということか。

「凄いなあ。スゲー。凄いですね。もの凄く……。凄くない？。凄いな。」

あのひととこのひとと、みなさんがお使いになつていて、聞き慣れた、耳にも唇にも心地よく、少し勇ましげなことばを使うと、気分は程よく高揚しながら、平安でもあるの

だろうか。

さきまな凄、

凄絶。凄切。凄惨。凄艶。凄凄。凄烈。凄楚。凄寥。凄風。凄然……

についての多角・重層の熟考を切望する。

「スゴく寂やか。スゴく和やか。スゴくゆつくり。スゴく普通。スゴくのんびり。スゴく穏やか。なにに襲われると、この瘦せさらばえた身の毛が立つ。」（一）